

「お茶の時間」を通した 幼児期の「学び」に関する一考察

村 井 尚 子
平 井 互
吉 川 嘉 宏
中 川 あかり

1. 研究目的と研究方法

幼児期に茶道に触れることはどのような意味をもつのだろうか。本稿では、日常の保育の時間の中に「お茶の時間」を定期的に導入している園において、「お茶の時間」が子どもの育ちにどのような影響を与えているか、あるいは与え得るかを検証することを目的としている。本研究の対象としたL社会福祉法人の園では、4、5歳児の保育時間中に月に1回程度お茶の時間を設けている。お茶の時間には裏千家淡交会の指導者が指導にあたり、子ども達が交替でクラスの友達のためにお茶を立て、お菓子を出している。お稽古というよりも遊びの一環として茶道を導入することを目的としている。

本研究で、幼児期に茶道に触れることによって身につくと想定したのは、①日本の四季の変化に応じた設えやお茶菓子などを通じた季節感の気付き、季節の変化への感受性、②所作や立ち居振る舞いといった身体技法の獲得、③もてなしを受ける側の立場に立って物事を見る「他者への思いやり」「感謝の気持ち」といった向社会的行動の育ち、④集中力、我慢強さの育ち、の主に4点である。実際に茶道を保育のカリキュラムに取り入れている保育園の参与観察および、茶道の指導者、保育者に調査を行うことでこれらの点を明らかにしていくことをめざしている。

法人として茶道の導入を進めているL社会福祉法人内の33（うち13園は茶道

導入済み)の保育園・こども園に質問紙(自由記述式及び子どもの普段の様子を尋ねる調査項目(5件法))を郵送し、4、5歳のクラス担任の保育者に回答を依頼。PDF ファイルのメール添付による返送もしくは郵送にて回答を得た(回収数、26園、延べ数53件。回収率78.8%)。さらに、茶道の時間の参与観察及び茶道指導者(本稿では指導者とする)及び担任保育者への半構造化インタビューを行った。調査に関してはいずれも個人情報保護にかかわる説明を行い、対象者より同意を得ている。

2. 参与観察における子どもの姿

本稿では、上記の調査のうち、参与観察の結果の概要と茶道導入済みの園からの自由記述の回答を取り上げて分析及び考察を行う。

1) S 保育園の事例とその分析

2019年10月15日、9時半から16時までL法人S保育園の4歳児クラスの参与観察を行った。観察には、執筆メンバーの全員が立ち会い、その後、保育者の茶道のお稽古の時間の観察、保育者へのインタビュー、茶道指導者I氏へのインタビューを実施した。インタビュー内容はI氏の了解のもとに録音し、反訳を行った。

〔S 保育園におけるお茶の時間〕

S 保育園は、今回の研究対象となったL社会福祉法人内の園の中でも最初にお茶の時間を導入された経緯がある。4歳児クラスと5歳児クラスに対して、月に一度、指導者がお茶のお稽古の時間を担当している。年に一度、保護者や地域の人を招いてのお茶会も開催されていて、子ども達は4歳児クラスになったらお茶のお稽古ができるという憧れをもって進級してきていると言われている。今回は、お茶のお稽古を始めて半年ほど経った4歳児クラスでの様子を見学させていただいた。このクラスの子ども達はお茶を自分で点てる経験を始めたばかりであった。

〔お茶の時間を待つ〕

午前中の時間帯に4歳児16人がそれぞれ8人ずつ2グループに分かれてお茶の時間に参加していた。お茶室に見立てた8畳敷の間に入る前に、待合の椅子に腰かけて待つ子ども達の姿には、何が起ころのか、どんなお菓子が食べられるのかといったワクワクした期待感と、ちゃんとお茶を点てることができるのかという、ほど良い緊張感がみなぎっている。(お茶室に見立てた8畳敷の間に入室することは、日常の保育園での生活から切り離されたハレの場に身を置くことを意味していると言ってよいだろう)。



図1 お菓子を差し出す子どもとお礼を言う子ども

〔おもてなしをする〕

この日は、子ども達は自分で茶筌を使ってお茶を立て、そのお茶を向かい側に座っている同じクラスの友達に出すという実践が行われていた。最初に、お互いに挨拶をし、指導者の先生のお話を聞きながら、まずお菓子を取りに行つて友達の前まで運ぶ。おもてなしする側の子が「お菓子をどうぞ」と言っているに対して、おもてなしされる側の子が少し前に出てお礼を言う。

お菓子のお皿を下げたあとは、お抹茶とお湯の入ったお茶碗を自分の席までしずしずと運び、正座して茶筌でお茶を点てる。お茶が出来上がったら再び向かい側に座っている友達にお茶をもっていく。(お菓子が食べられるということがお茶の時間のインセンティブの1つであるようだが、中にはお菓子が苦手な子どももいる。この日のお菓子はハロウィンにちなんだカボチャの形をかた



図2 ハロウィンのお茶菓子

どったものであった。指導者は、茶道の型としての身体技法を伝える際に、可能な限りその意味を伝えていた。4歳児に理解できる言葉で伝えることは容易なことではないが、この日観察を行った子ども達は、その意味を理解し、それぞれがなんとか「きちんとやろう」と努力している姿が見られた。「きちんとやる」ことはこの時期の幼児にとってどのような意味をもつのか、所作の美しさは普遍的なものなのか、文化的なものなのかなど、考察の余地は多々あるが、観察している限りにおいて、子ども達はその所作、行為を「せねばならない」から行うというよりは「そうすることが心地よい」から行っているように見受けられた。また、後述するが、本物のお茶碗、菓子皿を用いることは、「本物を使っている自分」という自己感覚につながり、物を扱う際の責任感に結びつくのではないだろうか。



図3 初めてお茶を点てる

「きちんとやる」ことはこの時期の幼児にとってどのような意味をもつのか、所作の美しさは普遍的なものなのか、文化的なもののかなど、考察の余地は多々あるが、観察している限りにおいて、子ども達はその所作、行為を「せねばならない」から行うというよりは「そうすることが心地よい」から行っているように見受けられた。また、後述するが、本物のお茶碗、菓子皿を用いることは、「本物を使っている自分」という自己感覚につながり、物を扱う際の責任感に結びつくのではないだろうか。

【保育者のお茶の時間】

S保育園では、同じ指導者から保育者もお茶のお稽古を受ける時間がある。希望者のみであるが、日常の多忙な子どもとの時間から少しの間離れて、お茶と向き合う時間が設けられていることには意味があると考えられる。指導者からは、「保育時間中なので、どうしても気持ちが焦っているが、一呼吸置いてもらうことを大切にしている」「気持ちを切り替えられるようになることが重要」といった留意点が語られた。参加していた保育者からは、「ホッとする時間」「子どもと共有できる経験が可能」といった言葉が聴かれた。こちらも



図4 保育者のお茶のお稽古

後述するが、保育という「ケ」の時間の中に、お茶の時間という「ハレ」の時間が挿入されることで、より一層、「ケ」の時間のもつ意味が認識されるであろう¹⁾。日々動き続けている保育の日常においては、子ども（達）の行動、行為に対して即座の対応が求められる。たとえば、時間になっても園庭から保育室に入ろうとしない子どもに対して、「お部屋に入ろうね」という言葉をかける、その前の一呼吸の間が、「この子どもはなぜ保育室に戻る気持ちに、今、なれないのだろう。何を欲しているのだろう」と考える猶予をもたらし得る。そうすることで、子どもの気持ちにより寄り添った対応が可能となると言える。多忙で即座の行動が求められるからこそ、ほんの一瞬の「間」が必要なのである。あくまで仮説ではあるが、そこに、お茶の時間の「一服」が影響を与えていると言えるかもしれない。

子どもにとっても、「いつも先生でいる人が、自分たちと同じようにお稽古をしている」ということが、「学んでいる人」としての保育者への親しみと尊敬につながるのではと推測される。

2) T 保育園における参与観察

2020年2月18日午前10時から13時まで東京都台東区T保育園を村井が訪問し、5歳児クラスのお茶の時間の参与観察と指導者および保育者（園長・5歳児クラス担任）のインタビューを実施した。インタビュー内容に関しては、本人の了解のもとに録音し、反訳を行った。

〔T 保育園におけるお茶の時間〕

T 保育園では、当該児たちが4歳児の秋からお茶の時間を導入し、今回で10回目とのことであった。家でお茶を点てていただくという経験をしたことのある子どもは多くはないものの、園が地域を大切にする東京の下町に位置していることもあって、地域のお祭りなどで、日本の伝統文化に親しむ機会が多く、お茶席を目にしたことがある子どもも比較的多いとのことである。

〔お菓子作り〕

当日は、日頃お茶のお稽古の際に使用するお菓子を作っておられる和菓子職人の方が来園され、子どもにお菓子の作り方を伝授しておられた。ひな祭りに合わせ、桃とひな人形をかたどったお菓子を作る。子どもにとってお菓子を作るのは初体験といえるが、図5に見られるように、粘土を丸めて形を作っていく遊びと同じ工程を経て、各色の練り切りを桃とひな人形の形に作り上げていく。筆者も一緒に挑戦させていただいたが、なかなか難しく、思った通りの形にならない。子ども達は真剣な表情でお菓子づくりに挑んでいる。ようやくできあがったお菓子を保育者やお茶の指導者、和菓子職人さん、そして参与観察者である筆者に見せて、出来栄をほめてもらいたい、頑張ったことを認めてもらいたいという姿が多く見られた。また、せっかく作ったお菓子は、1つは自分でいただき、もう1つはお世話になっている方に渡そうということになり、競っ



図5 子ども達による和菓子作り



図6 職人さんのお手本



図7 自分で作った和菓子とお茶をいただく

て「自分のお菓子は〇〇先生に食べて欲しい」と声を上げる子ども達の姿が見られた。

「お茶をいただく」

本園では子ども達がお茶の時間に参加するようになってからさほど時間が経っていないこともあり、今回は指導者が点てたお茶を自分の席でいただくという形が導入されていた。お茶碗に入ったお茶が運ばれてくると、どの子どももきちんと姿勢を正し、お茶に向き合う様子が見られた。左手にお茶碗を乗せ、回していただく手順を緊張しながら確認しつつ行なっている。お茶碗が子ども達の前に届くと、それまでにぎやかだった保育室がずっと波が引いたように静かな場へと変わるのが感じられた。

「おしるし」をいただく」

今回がお稽古としては最終となるということで、茶道裏千家家元と園長の署名が入った「おしるし」が子どもたち一人ひとりに指導者から手渡された。「おしるし」には、「お茶のおけいこをとおしてしぜんをたいせつにしともだちとなかよくすることをまなびました」と記されており、幼児期の茶道において、「自然を大切にする心」「友達と仲良くする心」を育てることがねらいとされていることが分かる。一人ひとりの名前が指導者によって呼ばれ、前に進み出ておしるしを受け取っている。お茶をいただいていた時にも増して、さら



図8 お茶のお稽古のおしるし



図9 おしるしに見入る子ども

なる静謐の時間が訪れ、子ども達は「大切なものをもらった」と感じていることがうかがえた。図9は、おしるしに見入っている子どもの姿であるが、どの子どもも一様に居住まいを正し、受け取ったおしるしを大切に大切に扱っていた。

3. インタビュー内容の分析

S保育園の指導者I氏および4歳児クラス担任、T保育園の指導者T氏、5歳児クラス担任、園長K先生の計5名に対してインタビュー調査を行なった内容を以下にカテゴリーに分けて考察する。

〔型と心〕

指導者I氏は、「型」が相手への思いやりが現れたものと考えて指導をされており、「心が入っていない型には意味がない」と言われていた。生田は、現代の学校教育において子どもに手続きのみを覚えさせる営みが優位となってしまっていることを批判する。「教師といえどもはじめから子どもに手続きのみを丸覚えさせることが最善であると考えているわけではない。できることなら子どもに手続きの意味を理解させたいと考えて授業を進めていくであろう。しかし、最終的な評価がテストの点数によって下され、しかもその評価が次の段階に進むための通行札になるということを子どもが気付くのにそう時間はかからない。…こうして、教師も、子どももひたすら意味の世界から分離した手続きの訓練に従事することになる（強調は引用者）²⁾」。

お茶の時間に子ども達が学ぶ手続きの一つひとつ（なぜお茶碗を両手で受け取るのか、なぜお茶碗を回すのかなど）が、それぞれ意味を持っていることを子どもに伝えること、意味の理解とともに手続きを身に付けることが、ここで指導者I氏が言われている「心が入っている型」へと繋がると考えられる。学校における手続きが意味と分離したものにならざるを得ない状況があるからこそ（それ自体を変えていかねばならないのはもちろんではあるが）、幼児のこの時期に、「型」「手続き」のもつ意味を子ども達が了解することの重要性を認識しなければならない。

〔家庭との接点〕

I氏はまた、お茶碗の持ち方や季節の移り変わりなど、現代の保護者自身が経験していないことを子どもを通して知ってもらうことに意義を見出している。「ビワなどの家庭ではあまり食卓に上らない素材を使ったお菓子の時に、『今度お家の人とスーパーに行ったらビワがあるか探してみてね』と言うんです」といったように、I氏はこういった自らの試みを表すのに「ささやかな抵抗」、「10人に1人は覚えてくれていたらという確率の悪い種まき」という言葉を用いる。一世代飛ばして子どもに伝えることで、消滅の危機に瀕している文化や伝統に油をそそぐこと、それをI氏は「抵抗」という言葉で示している。その油は、播かれた種から「10人に1人」という「悪い」確率で芽を出し、育ち、実をつけた菜種から得られることになるだろう。

〔お茶の時間〕

お茶の時間は、挨拶から始まり、挨拶に終わる。この仕切られ、区切られた時間は、近代合理的な目的志向的な時間のありようとは異なるありようを示していると言えよう。

「流れとしてのお茶の時間って、じゃあこれ何分でやりましょうとか、何時までですとかじゃないじゃないですか」。「一点前終わるまで1つのお茶の時間」（I氏）。何分から何分までの時計の時間としてではなく、「1つの流れとしての時間」、これは「お茶の時間」がその外部に目的をもつ労働の時間ではなく、その時間の内側にその意味、目的が見出されている時間（これを労働の時間と対比的に遊びの時間ということが出来る）だからと言える。このことは、「時計とか人工的なものは、お茶も目に付くところに置かない。普段は置いててもお稽古の日は撤去します」（同）という語りからも受け取れる。

目的志向的な労働の時間は、子ども達の時間感覚も蝕んでいる。「何分までに」「早く早く」といった時間感覚は、その後をやってくる「『何ものか』のために」、今の時間を犠牲にする。お弁当を何分までに食べて、その後〇〇をする。その〇〇は何分までに終えて、その後△△をする。常に次の予定のために

今があり、次の予定はまたその次の予定のために消費される。この時間感覚を生きる限り、「今という時間」を大切にすることが難しくなる。しかし、お茶の時間には、その後に続く「○○」や「△△」がない。

「(食べるのが遅い子を) 本当にみんなが嫌がるんじゃなく待てちゃうんですね。もうそれがその人の個性みたいな感じで。最初、始めたばかりのころ、すごくすてきでいいなと思って、この感じが小学校まで保てたらいいんじゃないのって思って」(同)。それゆえ、子どもは他の子がお菓子を食べる、お茶をいただく時間を「待つ」ことができるのではないだろうか。

このことは、幼児におけるお茶の時間を主題とする我々に重い課題を投げかける。何かのために、「お茶の時間」を利用することは、その根本的な意義に反することになるからである。「しつけのために」、「なんらかの(認知的・非認知的) スキルを身に付けさせるために」、「早期教育のために」お茶の時間を利用することを、我々は厳に慎まなければならない。もし、「しつけのために」お茶の時間を利用するなら、子どもは、「しつけが行き届いていない」と思われる他の子どもを急かし、攻め立てるだろう。それこそが、I氏が「この感じが小学校まで保てたらいいんじゃないの」と言っている、まさにその真逆の方向へと向かわせることになるのである。この点に関しては、後述する。

外部に目的をもたないお茶の時間は、保育者にとっても有意義な時間であるようだ。「不思議なんですけど、すごく疲れて今日はお稽古もお茶飲むだけにしようかなとか、お点前もサボっちゃおうかなとか、仕事に疲れていても何かこうそこの空間に入っちゃうと、何かそうでもない疲れを忘れるというか、お点前やろうかな、やっぱりって思ったり、何でしょうね」(S 保育園 4 歳児担任)。上述したように、「ケ」の時間のうちに「ハレ」の時間が区切られてあることにより、「疲れを忘れる」。このように論じていくと、「ケ」の時間が「労働の時間」としてあり、「お茶の時間」という「ハレ」の時間が「遊びの時間」といったように、対比的に捉えられるとも言えるかもしれない。

〔ものを大切に作る＝大切にされている〕

「なんで両手で持つのかっていうこと、やっぱりこれ園で先生方が一生懸命皆さんの稽古のために用意してくださったものだから、これは割れてしまうものだから両手でしっかりと大切に使わないといけないっていうことは割としっかりとっているの、（親指と人差し指を下に向けて肘を上げながら）片手でこんなふうを持つ子はいなくなりましたよね」（I氏）。「お茶だけでなく、食事のお茶碗も（この園では）全部陶器にしてるんですよ。プラスチックのほうが処理簡単じゃないですか。でもそれってやっぱり軽過ぎちゃって安物っぽいので乱暴に使う。でも陶器の茶わんだと重みがあって本物だから、やっぱり落としたら割れるっていうのが分かるから大事に使う」。「本物ってやっぱりうれしいんだって。本物じゃないもので遊ぶことも楽しいけど、やっぱり本物って楽しいんだっていうか、誇らしいというか」（同）。

両園とも、お茶碗は、「落としたら割れる」本物の陶器を使用している。本物を使うことができるということは、「自分が本物を使うに値する存在である」ということと同義である。落としたら割れるということは、1つしかないそのお茶碗が失われてしまうということである。たとえどんなによく似た造りのお茶碗が他にあっても、「そのお茶碗」は1つしかない、代替不可能なものである。代替不可能な、その意味で固有名詞をもった「そのお茶碗」が、割れて失くなってしまうか、それとも大切に扱われるのが、「その子ども」に託されること、それは、子どもにとって、自分が（お茶碗を大切に扱う人として）信頼されていることを示しているし、さらにまた、自分が代替不可能な存在であること、自身が大切な人として認められていることを感知することに繋がっているのだろう。S保育園で、水屋で受け取ったお茶碗を大切に大切に運ぶ子どもの少しはにかんだ、誇らしい姿を見て、そのように感受した。

大切にされるのは、道具だけでなく、もちろん一人ひとりの子どもの存在そのものである。「碎けないっていうのは私はうちのやっぱり師匠のよく言われていた言葉で、どんな年代の人にも敬語で話さない、子どもであろうがおぼ

あちゃんであろうがどんな年代の人にも同じように接しなさいっていうのはすごく言われまして、それは私も気を付けてはいます。尊重しているのが分かるので、相手もちゃんと接してくれますね」(T園指導者T氏)。T園の指導者が語るこの言葉には、「敬語」をきちんと使用することで、相手を大切な人であると尊重していることが示されている。保育の日常においては、気軽な言葉が用いられることで親密性が増し、安心感が育まれるとも言えるが、区切られたお茶の時間においては、「1人の客」として大切な存在として扱われることで、子どもの自己も尊重される。T氏は、「自分が大切にしてもらえる時間」の存在に関して、次のようにも語っている。「きちっとする時間と普段すごく元気に遊ぶ時間と、区切りがあるのが大切だなって。それがやっぱり一番のお茶のよさかなっていうふうに私は今は思う。もちろん文化とか自然とかお友達大切にするとかも全部大切だと思いますが、やっぱり子どもたちが今はちゃんとして、何ていうんですかね、自分が大事にもらえる時間っていうか。何か今ってそういうのがすごく少ないのかなって」(T氏)。

おしるしについて、T園の5歳児担任保育者と園長が語っていた言葉を以下に引用する。「もらったものをちゃんとみんな見てるのが、これは何かすごいものもらったぞっていうのがみんなの中に浸透していて、すごく静かっていうか」(T園5歳児担任)。一人ひとりの子どもは、「家元」のお名前がどのような意味をもつのかを理解できていない場合も多いかもしれないが、「何かすごいもの」であることは了解できている。そしてまたここでも、「何かすごいものをもらえた自分」が、子どもの自己の肯定感へと繋がっていくと願いたい。

〔お茶の時間の約束〕

「いつも3つの約束っていうふうに言っていて。子どもが覚えなくても自然に何ていうのかな、一生懸命頑張って覚えなくても頭に何となく入るような言葉で、まずおっきな声でしゃべらないっていうことと、走らない、で、みんなと仲よくするってこの3つの約束は守ってお稽古しましょうっていうことはいつも言っているんですね。一人ひとりがおっきい声でしゃべっちゃうとやっぱ

りその場はお稽古じゃなくなっちゃう。だから1つのことをみんなで楽しい時間を共有するっていうことが大切だから、何か話したいことあっても小さい声でっていうのはね」(T氏)。

区切られた時間、遊びの時間は、なんでも好きなことを好きにできる時間ではない。その時間を共にする人たちのなかで共有されるルールを守ることが求められる(たとえば、鬼ごっこをしていて、自分が嫌だからといって鬼を急にやめたり、急に鬼を捕まえたりする逸脱は認められない)。T氏の約束は、「静かに話す」、「走らない」、「みんなと仲良くする」という3点であるという。「楽しい時間を共有」するために、この3つを守ることが大切だとされている。

〔子どもの変化〕

「隣でちょっとできない子がいるとこうだよって教えてあげたりとか、助け合うっていうこと。言葉で言うのではなくて、自然と手を出して助けてあげるとかっていう姿があったときに、何か成長してるのかなって思いましたけどね」。「一応同じ机とかちょっと身近な人を見て合わせようかなとかっていうところは出てきたかもしれない、まだあの子が終わってないからじゃあ待とうとか。それはこちらが言わなくても自分たちで話をしたりとか、気を遣っていたりとかはできるようになりました」(T園園長、5歳児担任)。インタビュー開始当初は、クラスの子どもたちの「ちょっと大変」な様子が語られていたが、話が進んでいくにつれて、子どもたちの変化に関する言葉が語られてきた。言葉で指摘するのではなく、「自然と手を出して助けてあげる」姿、「自分たちで話をしたりとか、気を遣っていたりとか」できるようになった姿は、年齢による成長であるかみしれず、それをお茶の時間の効果であるかどうかを分節することは難しい。ただし、担任保育者が「動と静」という言葉を使って表現していたことは興味深い。「体操教室は動だけれど、お茶の時間は静。静かにお友達の話の話を聞いている」、「だいたい周りが見えるようになりました」と。

4. 保育者の自由記述による子どもの変化の分析

本章では、保育者に対して行なったアンケート調査の分析を行う。アンケートは、子どもの姿を5件法で評価する部分と自由記述の部分に分けた。本稿においては自由記述の分析を行うことにする。

1) 自由記述の内容

自由記述に関しては、「季節の変化への気付き、感受性」「子ども達の所作、立ち居振る舞い」「子ども同士の関係」「子ども達の遊びへの姿勢」「集中力、我慢強さ」「ご家庭や保護者との関わりの中でのエピソード」にかんして、お茶の時間を通じてクラスの子どもの日常に変化や影響があったかを尋ねた。また、保育者自身の変化についても尋ねている。ここではその一部を掲載し、考察を行う。

〔季節の変化への気付き、感受性〕

- ・お菓子を通じて

季節を現わすお菓子を通じて、その時期に咲いている花や草木に関心をもつようになった。「月を追うごとに今月は何かを楽しみに考える姿がある」等。

- ・指導者の先生のお話しを通して

指導者の先生から紹介してもらった季節の移り変わりや自然に対して興味をもつようになったという回答もある。「日常生活の中で散歩先や園庭で、草木や木々の様子に興味を持ったり、季節の移り変わりや紅葉などの美しさも感じられるようになった」、「月の事象を図鑑などで調べて、興味関心を深めていることもあり、茶道の日になると『今日のお菓子はなんだろう』と楽しみにし、季節に関するものから予想し考える姿が見られる」等。

一方で、季節の変化への気付きにまでは結びついていないと言えないという回答も2件あった(22件中)。

〔子ども達の所作、立ち居振る舞い〕

- ・普段の保育時間にはあまり影響がない

お茶の時間には「静かに座る」「歩き方や手の位置を意識できるようになってきた」が、普段の所作や立ち居振る舞いにまでは結びついていないという回答も3件であるが見られた。

・普段の保育時間への影響がみられる

15人の回答者からは、お茶の時間以外にも影響が見られるようになってきたという記述があった。「物を大切に扱おうとするようになりました」という回答は、お茶碗という「ぞんざいに扱って落としたり割れてしまうもの」を使ってお茶を点て、他の幼児に供する経験を通して、物を大切に扱う意味を体感していると考えられる。

また、「おじぎの仕方の変化。顔（目）を見て言葉を伝えてからお辞儀をするようになった（意識が向けられるようになった）」「相手の言葉を『受ける』ということを教えていただいたので、生活でも言葉を受け止め返していくようにつなげていった」等の回答からは、他者に対する真摯な向き合い方を学んでいると考えることができるかもしれない。

「活動によって静かになるものとそうでないもののメリハリが少しずつわかるようになってきている」との回答からは、必要な時には自己の行動を抑制したり、状況によって切り替えを行っていくセルフコントロールの能力の育ちと捉えることもできる。

〔子ども同士の関係〕

本設問は、共感性（思いやり）や感謝の気持ちなどの程度育っているかを意図して行ったものである。得られた自由記述としては、主に以下のようなものがあつた。

「ありがとう、どうぞなどを言い合うと嬉しいと感じるようになり、自然と出せるようになっていく」。感謝が自然に表出されるようになるのは、7歳から10歳頃とされているが（Emmons & Shelton, 2002）、おもてなしをすることで、相手から「ありがとう」と言ってもらい、あるいは自分がおもてなしを受けて「ありがとう」と伝えることを通じて、その行為の嬉しさが身についてい

ると保育者から評価されている。「感謝」という概念には至らないかもしれないが、感情面での体得はこの時期の幼児にとって意味があると言えるのではないだろうか。

「抹茶や小豆が苦手な友達の気持ちを理解しその友達が頑張って挑戦している姿を見て応援したり一緒に喜んだりが自然に行えている」といった励まし合いの姿も見られた。

「茶道の先生から『人のことより自分がどうなのか』ということをやっていたが、相手の嫌な面ばかり目を向けるのではなく、自分に振り返るようになった」といった回答も得られた。

〔集中力、我慢強さ〕

「特に変化は見られない」という回答や無回答も多少あったが、15件はポジティブな影響に言及している記述であった。ただし、月齢が進むとともに身に着いたものなのか、お茶の時間の効果なのかは分からないと答えた回答もあり、この点については他の項目と同様に検討の余地が残されている。

2) 共起ネットワーク分析

自由記述の全ての設問の回答の文176件を、KH Coder を用いて共起ネットワーク分析を行なった。前処理を実行し、文章の単純集計を行なった結果、総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は5,784、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は313であった。共起ネットワーク分析では、最小出現数を5に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を60に設定した。図10に結果を示すが、出現数の多い語ほど大きい円で描画され、白から色の濃いものの順に中心性（それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているか）が高くなることを示している³⁾。

「お茶」と「時間」に引き続き、「茶道」と「楽しむ」という語が最も多く、また関連性の高い語として現れており、「楽しむ」という言葉が「茶道」と共

図10 自由記述の共起ネットワーク図

た季節感の気付き、季節の変化への感受性を身に付けることができている場合が多いと捉えることができると思われる。

次に色が濃いのは、「苦手」「人」「一緒」「自分」であり、(お菓子を)「食べることが苦手」「座ることが苦手」な子が友達と一緒にできるようになったという表現が見出される。その他にも、「静か」、「少し」、「増える」や、「正しい」、「姿勢」、「良い」、「姿勢」といった表現、「話」と「聞く」、「活動」と「メリハリ」、「挨拶」と「丁寧」といった②の身体技法の獲得に加え、③もてなしを受ける側の立場に立って物事を見る「他者への思いやり」「感謝の気持ち」といった向社会的行動の育ち、④集中力、我慢強さの育ちにも繋がっていると言える。

5. まとめと考察

以上、参与観察とインタビュー、さらに保育者の自由記述による子どもの変化について分析と考察を行った。研究の着眼点として設定した、①日本の四季の変化に応じた設えやお茶菓子などを通じた季節感の気付き、季節の変化への感受性、②所作や立ち居振る舞いといった身体技法の獲得、③もてなしを受ける側の立場に立って物事を見る「他者への思いやり」「感謝の気持ち」といった向社会的行動の育ち、④集中力、我慢強さの育ちの観点において、いずれもポジティブな回答が得られていると言えるが、幼児にとってのお茶の意義という観点から保育所保育指針との関連で考察を加えたい。

まず、領域環境の(ア)ねらい①「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」、(イ)内容①「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」、③「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」という点には、上記の保育者への自由記述アンケート調査の分析、共起ネットワーク分析からもその効果がうかがえる。また、⑥「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」に関しても、茶道の文化の一端に触れる経験ができていると言えるだろう。

次に、領域人間関係の（ア）ねらいの②「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」、（イ）内容の⑩「友達との関わりを深め、思いやりをもつ」に関して言えば、担任をはじめとする保育者やお茶の指導者から指導や援助を受けながら、クラスの友達と共にお茶の時間を楽しむことで、「一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」こと、「思いやりをもつ」ことが可能となるだろう。指導者へのインタビューで、お菓子を食べるのが苦手な子をみんなで待つことができるようになったり、お互いのためにお茶を点てることで、「相手に喜んでもらえる」「相手のために」といった気持ちが育つことが期待される。⑬の「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」に関しては、T保育園で行われていた地域の和菓子職人の方を招いてのお菓子作りの試みや、今回は扱うことができなかったが、S保育園などで実施されている地域の方々や祖父母を招いてのお茶会などがその機会となり得るだろう。

また、⑫「共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う」や、領域環境の（イ）内容の⑦「身近なものを大切にする」は、上述した「落としたら割れるお茶碗」を大切にすることと関係が深いと言える。さらに道徳的な側面においては、人間関係（ア）ねらい③「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」に該当する部分が多く見受けられ、（ウ）内容の取扱い④「道徳性の芽生えを培うに当たっては、…子どもが他の子どもとの関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること」とされている点に合致するだろう。さらに、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に関しても、エの「道徳性・規範意識の芽生え」における「相手の立場に立って行動する」「きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し」という部分が当てはまるだろう。

ただし、上でも述べたが、「お茶の時間」はあくまでも、外部に目的をもた

ない遊びの時間として捉えるべきであると考え。保育所保育指針にも以下のような記述がある。「遊びは、それ自体が目的となっている活動であり、遊びにおいては、何よりも『今』を十分に楽しむことが重要である」。それゆえ、保育士等に求められるのは、「短期的な結果を重視したり、子どもの活動が特定の知識・能力の習得に偏ったりすることがないように留意する」ことである。

①季節感の気付き、季節の変化への感受性、②所作や立ち居振る舞いといった身体技法の獲得、③向社会的行動の育ち、④集中力、我慢強さの育ちは、「お茶の時間」を子ども達が楽しく過ごしたことによって、結果的に見出されるものであって、感受性や身体技法、向社会性、集中力、我慢強さを育てるためにお茶の時間が利用されるとしたら、それは子どもにとっては労働の時間となり、苦痛の時間となり得る。訓練や早期教育のための「教育」と「お茶の時間」とが同一視されることがないようにとの願いを込めて本稿を閉じたい。

参考文献

- 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会、1987年。遠藤利彦研究代表、国立教育政策研究所平成27年度プロジェクト研究報告書『非認知的（社会情動的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』、平成29年。
- 柏木博『「しきり」の文化論』講談社現代新書、2004年。
- 近藤直也「対立概念としてのハレとケの再評価」『関西大学博物館紀要』第3巻、1997年、pp. 169-199。
- 厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018年。
- 田中秀隆『岡倉天心 茶の本』淡交社、2013年。
- 波平恵美子「「ハレ」と「ケ」：日本人における日常性と非日常性の演出」『日本音響学会誌』45巻2号、1989年、p. 163-166。
- 波平恵美子『ケガレ』講談社学術文庫、2009年。
- 萌文書林編集部編『子どもに伝えたい年中行事・記念日』萌文書林、2015年。
- 無藤隆編『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』東洋館出版社、2018年。
- 森口祐介『自分をコントロールする力—非認知スキルの心理学』講談社現代新書、2019年。
- 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部、1995年。
- Emmons, R. A., & Shelton, C. M. (2002). Gratitude and the science of positive

psychology. In C. R. Snyder & S. J. Lopez (Eds.) *Handbook of positive psychology* (pp. 459–471). New York: Oxford University Press.

謝辞

本稿は、京都女子大学宗教・文化研究所2019年度個人研究助成の研究成果の一部である。

註

- 1) 「ハレ」と「ケ」は、民俗学の専門用語として用いられる。波平によれば、「日本の年中行事は、1年を1単位あるいは2単位として、その中にいくつかの重要な儀礼をおこなうことによって時の流れを非均質的なものとしてきた。…ハレの日は儀礼が行われるまつり日であり。この時間は残りの日々とは異なる日とされ、人々の生活の多くの面で異なる行動がなされ、異なる物品が消費され使用され、また、そのことによってハレの日が残りのケの日とは異なることを強調しようとする」（波平、2009、249–250頁）。このように、「ハレ」と「ケ」の時間と空間、そしてそこにおける行動や使用される物品を対照的なものとすることで、「ケ」から「ハレ」を際立たせてきた。このような特別な時間をもつことで人々は日々の生活に区切りとリズムをつけて暮らしてきたと言える。また、岡倉天心はその著書、「茶の本」の中で、『『茶道』は、毎日の生活ではぱっとしない出来事に囲まれながらも、せめて美しいものを見つけようとあこがれる心が作りだした祭式である』と述べている。日常の生活様式から時間的・空間的に切り離されたところに存在するという点において「ハレ」の時間・空間としてのお茶の時間の意味が捉え得るのではないだろうか（岡倉天心の『茶の本』は、*The Book of Tea* としてニューヨークで刊行された。様々な日本語訳があるが、ここでは田中仙堂訳を採用した（田中仙堂『岡倉天心「茶の本」を読む』講談社学術文庫、2017年、311頁））。
- 2) 生田久美子、1987年、6頁。
- 3) 越中康治ほか「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析：共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』22号、2015年、67–74頁を参考にさせていただいた。なお、KH Coder に関しては、田中京子「KH Coder と R を用いたネットワーク分析」『久留米大学コンピュータジャーナル』28巻、2014年、37–52頁も参照した。

<キーワード>

幼児茶道 保育園 幼児の学び 日本文化 非認知能力